

～新渡戸記念の～

## 『言葉の院外処方箋』

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

### 第60回『根本に眼を据える ～ 人間社会の病理学 ～』

2021年6月6日は、定例の『東久留米がん哲学外来・カフェ』と『読書会』であった。今回は、新渡戸稲造 著『武士道』（矢内原忠雄 訳）の第4章『勇・敢為堅忍の精神』であった。『読書会』は2007年12月9日から、内村鑑三 著『代表的日本人』と交互に開始したようである。『武士道』は、4巡目であろうか！？ 毎回、新鮮な学びの時である。継続の大切さ、重要性を体験する場でもある。まさに、『すべての営みには時がある』（伝道者の書3章1節）である。今回は、下記の言葉が焼きついた。

「恐るべきものと 恐るべからざるものとを 識別することなり」（プラトンの引用）、

「生くべき時は生き 死すべき時にのみ死するを 真の勇とはいうなり」（水戸黄門の引用）

「平静は静止的状态における勇氣である」（新渡戸稲造）

「真に勇敢なる人は常に沈着である」（新渡戸稲造）

「余裕＝屈託せず、混雑せず、さらに多くをいれる余地ある心である」（新渡戸稲造）

「汝の敵を誇りとすべし。しからは敵の成功はまた汝の成功なり」（ニイチェの引用）

富士山（3776m）は 変わらぬ不動の姿である（添付）。若き日に読んだ『あれが日本一の名物だ〈富士山〉あれより他に自慢なものは何もない』（『三四郎』夏目漱石）の文章が思い出された。多岐に別れる多様性の時代にあって、『末梢の一つ一つを追いかけていっても 本を見失えばいたずらに疲れるばかり、根本に眼を据える必要がある』が鮮明に甦った。『生まれて来た以上は、生きねばならぬ』（夏目漱石）である。『時代を動かすリーダーの清々しい胆力』としての『人間の知恵と洞察とともに、自由にして勇氣ある行動』（南原繁著の「新渡戸稲造先生」より）の文章が 思い出される今日この頃である。『国民の理想とビジョンをつくり出すのは、根本において教育と学問のほかにはない』（南原繁）。2021年6月14日は、富士山のある山梨県の山梨大学 医学部 消

化器内科教授：榎本信幸 先生から、特別講義『人間社会の病理学 ～ 賢明な寛容さ (the wise patience)～』の講義の機会が与えられた。「対象は医学科3年生ですが、今回は看護師や職員の方にも聴講していただく予定です。」との 暖かい励ましの ご配慮を頂いた。

# Cancer Philosophy

*Seeing Society from the Views of a Cancer Cell*



Okio Hino, M.D., Ph.D.